

めあてを高く
できるまで やれ

岡崎市立梅園小学校

校長室だより 1 1

令和 2年 9月18日
こん どう ふみ ひこ
近 藤 文 彦



ボランティア活動を考える 『お互い様』という支援の力

TEDx Anjo 杉浦 亜紗比 (すぎうら あさひ)

x = independently
organized TED event



1977年、大阪府生まれ。愛知県岡崎市育ち。2001年に公益財団法人オイスカの植林ツアーに参加したことで、マレーシアボルネオ島のジャングルにある小さな村ティウロンを初めて訪れた。村の人々に魅了され、個人的に度々訪れるようになり、2007年からは村への募金活動を開始した。1人で何の伝手もないところからはじめた活動だったが、1年で100万円も集金することができた。活動は募金から少しずつ形を変え、現在は公益財団法人オイスカ中部日本研修センターの協力のもと、植林活動へとつながっている。ヘアメイクアップアーティスト。

杉浦 亜紗比さんは、私が30年近く前に中学校で担任した生徒です。中学生の亜紗比さんは、どんなときにも笑顔。そして、どんな場面でもしっかりと「ありがとう」が言える生徒でした。その姿から、私の行動を変容させた生徒のひとりです。今でも感謝しています。先日「TEDで話したので、子供たちに紹介してほしい」とメールがありました。御主人は、命のメッセンジャーで有名な杉浦貴之さんです。



私にはマレーシアに大切な人がいます。ボルネオ島の小さな村ティウロンに住んでいます。ティウロンに初めて行ったのは2001年。私が24歳の時。植林ツアーに参加したのがきっかけでした。その3日間のホームステイが、私の人生を大きく変えました。私はそれから毎年のようにティウロンに通い続けています。

初めてホームステイした時、その暮らしはとて貧しく見えました。水道がなく、雨水をドラム缶に集めて生活しています。お風呂はボロボロの小屋のトイレの隅。ろうそくの明かりを頼りに体を洗っていると、大量の蜂が小屋いっぱい飛んでいるのが見えました。蜂を怒らせないように、静かに体を洗いました。ボルネオ島は南国ですが、夜になれば冷たい風が吹いて、水は悲鳴をあげたくなるほど冷たくなります。パパのフェリックスは、バケツ一杯分の水を温めて用意してくれました。そのお湯の温かさは体中に染み込みました。当時パパには、小さな子供が5人もいて、外でボール遊びをしたり、ため池で水遊びや一緒に歌を歌いました。大人たちもギターを弾いたり、太鼓代わりにバケツをたたいたり、私はまだ若かったので、ボランティアと言っても旅行気分。新しい服にしっかりメイク。でも、子供たちと汗だくになって自然の中で遊んでいたら、だんだんノーメイクで着飾らない方が自分らしい気がしてきました。

ティウロンの人たちの口癖は「ティダパパ (Tidak apa-apa)」大丈夫という意味です。小さなことは気にせず、何でも「ティダパパ」と笑い飛ばしていました。私の思う貧しい国のイメージと違って、ティウロンのみんなはいつも明るく楽しそうです。にぎやかなホームステイでした。あっという間にお別れの日が来ました。帰り際にパパと握手をすると、その手の中にはお金が含まれていました。日本円にすれば数百円かもしれないけれど、私は驚き、すぐにパパに返しました。同時に涙がブワーと出て泣き出す私を、ただただパパは微笑んで見守っていました。子供たちは破れたボロボロのシャツを着ているのに、その服を1枚買うこともしないで、自分よりもきれいな服を着て裕福に暮らしている私に、貴重なお金を差し出してくれたことが信じられませんでした。自分のことよりも、私のことを優先してくれる人に初めて出会いました。国際協力なんて少しでも思っていた私が恥ずかしくなるくらい、私を喜ばせてくれました。

みんなの笑顔が見たくて、何度も里帰りするように一人でティウロンに行くようになりました。すると、ティウロンのみんなも「おかえり」と言って私を迎えてくれるのです。村で仲良くなった少女は、私に宝物の小さな鶏の卵をプレゼントしてくれました。彼女が大切にラッピングして飾っていたものです。私も何か贈りたくて「何かほしいものはない」と聞くと、「何もいら

ない。あなたに出会えたことが最高のプレゼントだから」と、普段から分け合う気持ちが村にはあるんです。いつもスルスルーと木に登ってはフルーツを食べさせてくれる子供たち。一つしか取れなかった時は自分たちが我慢をして、私に食べさせようと思いました。だから私も、一口だけ食べて分けるようにしました。人に与える喜び、人にもらう喜び、それ以上に分け合うことが一番の喜びと知ったから。

そうやって7年がたった頃、パパから手紙が届きました。ティウロンでの仕事がなくなって出稼ぎに来ている。家族と会えなくて寂しい。笑顔溢れる家族の姿が何より好きだったので、その暮らしが無くならないために私にできることはないかと考えました。私を家族の一人として受け入れてくれるみんなに、恩を返したくて。ちょうどその時ある言葉を聞き、ハッとしました。「無力と微力は違う」そうか、私は無力じゃないんだ。すぐに一人で募金活動を始めました。何をどうやったらうまくいくか全く分からなかったけど、何もやらないゼロよりはましだと、募金箱を作って置いてくれる場所を探しました。より多くの人に知ってもらいたいと、話せる場所を探しました。ゼロよりはましだと始めた募金は、1年で100万円ほどになりました。見ず知らずの男性が自分は行けないからと、10万円の寄付をポンと出してくれたり、小さな子供が出してくれた10円玉。私が預かったお金にはたくさんの人の思いが詰まっている。これを届けるまでは死ぬない。人生で初めて使命感を感じました。これだけたくさんの思いやる日本人がいることをティウロンのみんなにも伝えたかった。植林ツアーでお世話になった団体の協力のおかげで、その募金で全世界に青いプラスチックでできた錆びない貯水タンクと、井戸を設置することができました。

その時はもう一つ大事な報告を持って行きました。実は募金活動をきっかけに夫と出会い、結婚が決まったんです。ずうっと結婚はまだかと聞いてきたパパに報告をすると、とても喜んでくれましたが、次の瞬間悲しい顔をして「亜紗比はもうここに来なくなるんだね」と言いました。私は「そんなことないよ。必ず来年夫を連れてくるから」と言って翌年夫を連れていきました。私はみんなを喜ばせようと、こっそりウエディングドレスを持って行きました。自分の晴れ姿を見せたかったからです。ドレスを着た私に「亜紗比パーティするよ」と当時数台しかなかった古い車にたくさんのリボンをつけて、私たち夫婦を迎えに来てくれました。会場はたくさんの花をつけた村に一つしかないボロボロの集会所。知らない間に結婚パーティーの準備をしてくれていたんです。それは、どんなに立派なリムジンや教会よりも、最高で幸せな結婚式でした。子供たちは並んで歌を歌ってくれました。出会った頃あんなに幼かったみんなが祝ってくれる幸せ。この子供たちの笑顔にどれだけの幸せをもらっただろう。この子供たちの笑顔をずっと見ていきたい。守っていきたい。私の両親席には幸せそうに微笑むパパとママ。私はティウロンのみんなに恩返しがたくて募金活動を始めたけれど、恩を返せたと思ったことはありませんでした。でも、そんなパパとママの姿を見られた時、ほんの少しだけれど、恩を返せたのかなと思えました。募金活動には批判もあったけど、全く響きませんでした。私には、みんながしてくれた結婚式のような体の芯から震えるような感動が、いつも心の中にあっただからです。去年、村の人たちが言ってくれました。「あの時亜紗比がこの村のためにチャレンジしてくれたのおかげで、ティウロンが変わった。みんな亜紗比に感謝してる」と。でも、私がティウロンを変えたんじゃない。ティウロンが私をこんなに情熱的に行動できる人に変えてくれたんだ。何より人を思いやれる気持ちが持てた。みんなが分け合い支えあい暮らすティウロンでは、ありがとうを「テレマカシ」、どういたしましてを「サマサマ (sama - sama)」と言います。「サマ」は同じという意味。「サマサマ」で同じ同じ。「お互い様様」と言っているようで、大好きな言葉です。貧しさに対する同情から生まれた一時的な支援ではなく、「みんなの笑顔を見たい」というシンプルな思いが、お互い様の関係を生み続ける。そんな家族のような関係が広がれば、世の中はもっと明るく笑顔になる。私はそう信じています。ありがとうございました。

この動画は「<http://tedxanjo.com/asahisugiura/>」で視聴することができます。

募金やボランティア活動は、日本ではまだ一般的だとは言えません。多くの災害が発生する中で、少しずつ盛んになっているようにも感じます。「国際支援」を自分がすることとは思わない人もたくさんいます。私は、生徒会活動でグアテマラに支援物資を送ったことがありました。盗難や輸送手段の未熟さから物資がきちんと届かない現実に愕然としたことを覚えています。

亜紗比さんは、ティウロンという地図にも載らないマレーシアの小さな村との出会いで人生を大きく変え、10年以上その村人たちへの支援を続けています。きっとこの行動が亜紗比さんの子供たちにも通じ、新たな関係ができることでしょう。亜紗比さんの生き方には感心し、今も学ぶことばかりです。



【ティウロン村での結婚式】

「ティウロン村の笑顔を守りたい」(<http://tiulon.web.fc2.com/>) のブログも参考に